

■菊田一夫 劇作家。戦前に喜劇作家の地位築き、〈敗戦〉後、「君の名は」ほか放送劇からミュージカルまで傑作次々。

きくたかずお

アヲヲ 創刊・1908＝ 横浜市西戸部町で、西郷武大・内田せんの四男に生まれる。本名數男。生後まもなく、台湾台北市に転居後、両親が離婚し、台北庁職員河野家の養子となるも、

明治天皇没・1912＝ 4歳：河野家に実子が誕生したため、土建業杉野家の養子となる。腸チフスに罹り、九死に一生。

第一次大戦始1914＝ 6歳：運送業菊田吉三郎と正式に養子縁組して、菊田姓となり、台北市第四尋常小学校に入学。

21ヶ条要求・1915＝ 7歳：養父が死去したため、

ロシア革命・1917＝ 9歳：養母の故郷長崎県南高来郡加津佐村に移住し、加津佐尋常小学校に転校するも、再び台湾に渡り、

大暴落・・・1920＝12歳：養母の七度目の夫金森養之助に連れられ、帰国。小学校中退させられ、大阪の菓種問屋安田市兵衛に年季奉公に出されるも、性格を問題にされて、まもなく解雇。引き渡された博徒の縁で、珍物屋商會に採用され、温厚な主人横山正之助のもと、ようやく充実した生活。この間、社長令嬢尾形美也子と出会い、初恋。

原敬首相暗殺1921＝13歳：

関東大震災・1923＝15歳：

護憲三派圧勝1924＝16歳：

治安維持法・1925＝17歳：

円本時代始・1926＝18歳：

金融恐慌・・・1927＝19歳：

共産党事件・1928＝20歳：

世界恐慌・・・1929＝21歳：

海軍軍縮条約1930＝22歳：

満州事変・・・1931＝23歳：

五一五事件・1932＝24歳：

国際連盟脱退1933＝25歳：

芥川直木賞始1935＝27歳：

日中戦争始・1937＝29歳：

健保+総動員 1938＝30歳：

大政翼賛会・1940＝32歳：

日米開戦・・・1941＝33歳：

・・・1942＝34歳：

創価学会検挙1943＝35歳：

年金+総武装 1944＝36歳：

敗戦・・・1945＝37歳：

新憲法施行・1947＝39歳：

極東裁判 1948＝40歳：

三大事件・・・1949＝41歳：

朝鮮戦争始・1950＝42歳：

独立回復・・・1951＝43歳：

マデー事件・1952＝44歳：

TV放送始・・・1953＝45歳：

自衛隊発足・1954＝46歳：

55年体制始・1955＝47歳：

国連加盟・・・1956＝48歳：

なべ底不況・1957＝49歳：

イヌハラム・1958＝50歳：

美智子妃・・・1959＝51歳：

安保闘争・・・1960＝52歳：

タイタイ病始・1961＝53歳：

全国総合計画1962＝54歳：

TV宇宙中継始1963＝55歳：

東京リビック 1964＝56歳：

いざなぎ景気1966＝58歳：

大阪万博・・・1970＝62歳：

ドルショック・・・1971＝63歳：

沖縄返還・・・1972＝64歳：

石油ショック 1973＝65歳：

その影響で、神戸市立商科実業学校の夜学に通い、同人誌に投稿したり、宝塚少女歌劇を見に行くうち、退社し、詩人をめざして上京、文選工をしながら、菊田一夫をペンネームで雑誌(歌劇)の詩壇に投稿。

神戸と東京の同人誌に入会し、コドモ社(童話)に投稿して佳作。集金中に荷馬車と衝突して負傷し帰店が遅れたのを持ち逃げと誤解されて憤慨し、

退社し、詩人をめざして上京、文選工をしながら、菊田一夫をペンネームで雑誌(歌劇)の詩壇に投稿、博文館印刷大争議に巻き込まれて、一晚留置。美也子結婚の噂を知るなど行き詰まり、自殺しようと鎌倉村木座に行き、心酔する萩原朔太郎を訪ねて回生。首席常連となり、同志と(太平洋詩人協会)を結成、

林芙美子らと付き合い、サトウハチローに可愛がられ、突然中国青島に渡るも、挫折後、その庇護で、(浅草公園劇場)に出ている諸口十九一座の文芸部見習いになり、脚本つくりの現場を知り、

一座が大阪の角座に巡業している時、初めて喜劇の一場面を創作、*浅草カジノ・フォーリー文芸部に採用されるも、解散となってしまいが、ハチローが玉木座部長になった

ことから、処女作「阿呆凝子迷々伝」を書くことになり、これが大ヒットして一気に高給取りとなり、早くもラジオ・ドラマ手がける。2作目「倭漢ジゴマ」を書くも、さらに大入りとなって、立作者となる。以後、傑作「西遊記」ほか、次々と書きまくるうち、エノケンに怒鳴ったことから、戯首になるも、

「ネオ・サルタンバンク」などミュージカルの萌芽となる作品、「三文オペラ」など映画の劇化創作するうち、ムラン・ルージュ結成した佐々木千里に救われて、作品を手がけるもヒットせず、

オペラ座に移って佳作「スマール・ホテル」「かなりや軒」をつくり、踊子春日静枝と同棲始めるうち、古川緑波と出会い、彼が結成した(笑いの王国)、

{古川緑波一座)に向けて、オペレッタを提供、喜劇作家の地位を築くが、

ラジオ・ドラマ「当世五人男」で、作曲家古関裕而との生涯のコンビが始まる。

高杉妙子を愛人とし、*アチャラカ芝居(弥次喜多お化け大会)が大ヒット、(東宝)の小林一三に褒められ、宝塚歌劇に初めて脚本「赤十字旗は進む」。(笑いの王国)を脱退した緑波に引き抜かれて浅草時代に終りを告げ、

「ロッパと兵隊」が大ヒットし、「髭のある天使」はじめ次々高揚劇を手がけ、

離婚し、妙子と再婚。かつて奉公した大阪舞臺に「道修町」を発表し、好評。初の戯曲集「わが家の幸福」。

内閣情報局の委嘱で本格的喜劇「花咲く港」を書き、得意の絶頂となるも、緑波との摩擦で退座、合併(東宝)で「今日菊」開幕前日、高級飲食店・劇場の閉鎖命令が出、(東宝)も解散。

敗戦後、高揚劇が戦犯の恐れと疎開するも免れ、戦後初のNHK連続放送劇「山から来た男」を手掛けて好評、NHK嘱託となり、ヒロポンを打ちながら、名作「鳩の団九郎」ほか放送劇を次々と書くうち、

GHQ意向を受けたNHK連続放送劇「鐘の鳴る丘」を書き、古関裕而の曲「とんがり帽子」とともに、大ヒット、突然実父から手紙が来て金をせびられたためつきあいを断る。教育上問題と、NHKが終結を決定するも、

妙子と離婚。存続を望む子供たちからの手紙で再開、この年まで続く。この年、実父が死去。帝劇「モルガンお雪」を書き、好評で越路吹雪を一躍スターとしたが、意見衝突で以後絶縁。NHK新連続放送劇「さくらんぼ大将」。演劇雑誌(現代劇)を創刊。

能瀬妙子と再婚。この年、日本の放送演劇界のGHQ支配が終り、自主番組制作時代に入る。

欧米の演劇事情を視察、ブロードウェイの力を知る。NHK連続放送劇「君の名は」は、NHK放送文化賞を受け、

{現代劇}廃刊。*この年まで続けられ、戦後の大衆文化史上忘れてはならないものとなった。

小林一三に招かれ東宝取締役に就任、製作・脚本・演出を担当、小林の発案で歌入りのアチャラカ2作を「東宝ミュージカル」と銘打って公演、大ヒットするも誤解を招いたことから、

浦島千歌子と同棲始。意識的なミュージカルを2作試みるもはかばかしく無かったが、以後不振続きだったが、「まり子自叙伝」上演(宮城まり子主演)で愁眉を開き、

「がめつい奴」(菊池寛賞受賞)、数寄屋橋に「君の名は」記念碑が建てられる。「がしんたれ」「雲の上団五郎一座」と次々ヒットさせ、

突然実母死去の通知があり山形に行き葬儀に出席。「放浪記」を皮切りに東宝文芸路線を定着させるなど、プロデューサーとしても卓抜な手腕を発揮。「香港」で、改めて本格的なミュージカルに着手、

自ら渡米して、上演権を獲得して、西尾恵美子と同棲始。「マイ・フェア・レディ」の成功に至り、

毎日芸術賞を受賞。「敗戦日記」を公表。

「風と共に去りぬ」など、和製ミュージカルにも先鞭をつけたが、*長年のライバルながら同志でもあった北條秀司と決定的に対立して演劇協会から脱退、糖尿病の悪化もあって、以後沈滞するなか、

恵美子も去って、孤独に暮らし、生涯敬慕してきた萩原朔太郎を描いた傑作「夜汽車の人・三幕」を発表するが、

イギリスでの「風と共に去りぬ」上演のため、病をおして渡欧するも大失敗で、打ちひしがれて帰国し、

没した。アメリカン・ミュージカル最大の賞とされるトニー賞が追贈された。

小幡欣治「評伝菊田一夫」、シリーズ「人間の記録」、「この人どんな人」、「没年日本史人物事典」、平凡社百科事典、山田風太郎「人間臨終図巻」、